

図書館だより

図書館との軌跡

50 数年前通った小学校には図書室さえ無かった。当時の経済状態から判断すると当然である。中学、高校時代において、学校に図書室は設置されていたが利用した記憶は皆無である。大学生になり附属図書館分館を利用するようになった。また、名古屋市立鶴舞図書館を利用したこともある。最近では愛知県立図書館を訪れる。探索したい事項をノートにメモを取る程度である。思い起こすと図書館の利用の折、薄暗く、狭い書庫を散策(?)し、目的とする書籍がどこに収蔵されているかを知ることから始まった。

大学院に入学すると、読む書物がそれまでから一変した。研究室の経済は困窮を極めていたこともあって、実験研究に十分携わることは出来なかった。それゆえ指導教授から時間があったら図書室(大学の中央図書館の分室)に行き、文献を読むことが義務化された。すなわち、図書室において購読している雑誌のうち、分野に関連した総ての雑誌の目次に目を通した。見出された関連文献のうち1~2編を、精読、理解して、セミナーで解説することの準備に多くの時間を費やした。当初、コピーが普及していなかったことに加えて、研究室の経済的理由のためコピーは出来なかった。したがって文献の重要な箇所をノートに書き写すことに終始した。一方、大学院の講義においても、教授は図書室から10冊位の製本済みの雑誌を抱えてきて、その中のデータを黒板に記しながら、講義を行った。

その後、コピーの利用が不自由無く可能となるのにかなりの歳月を要した。さらに情報量は格段に増えたことから、文献の精読に膨大な時間を費やした。1つの文献を読むと、その中の引用文献を遡る必要性に迫られたことも頻りに経験した。このような繰り返しによって、芋蔓式に文献が増加した。これによって、知識を積み重ねること以外に、どのような手段で研究成果が導かれたかを理解する努力が払われた。さらに解明されている事象を自分なりにインテグレーションする能力が遅々とはあったが養われた。かくして、1つの研究分野に関する世界の先端状況が鮮明ではないが解って来た。次に、未解明の現象を、どのような手段を用いて解明するかが問われるのである。その先が知りたくなるという果

健康生活学部長 青山 頼孝 教授

てしなき好奇心。事の解決の前提に困難が絶えず立ちはだかり、解決の道筋には、未知への学が存在した。

生来、国語、英語という語の付く科目がとりわけ苦手であった。現在も小説を読むこと、文章を書くことは依然として不得手である(本稿を記述したが、文章になっているか? 頭の中は不安の文字で満ちている)。しかし、メモを取ることに苦痛を感じない。図書館の机に本を数冊広げて、読み始めても理解出来ないことに頻りに遭遇した。ノートにメモをとる。メモが増加する。これを整理することに時間を要する。「塵も積もれば山となる。Many a little makes a mickle.」の諺のように、メモが多くなるとそこから、自ずから新しい発想が生まれることもあった。

図書館においても、集中力は長時間継続できない性格である。処方箋は、気分転換。時に他のことに思い巡らす。幸いなことに、図書館の周辺は緑豊かな環境に恵まれている。図書館の中は広く、いたるところに机が配置されているけれども、緑溢れる大樹を眺められる場所が良い。本学の図書館の閲覧室は明窓浄几の言葉にふさわしい。大きな樹木の威容さに感嘆する。大樹の枝も風、雨、雪などに耐えて、強くなっている。僅かな木漏れ日を吸収して生育する苔の美しさ -----。

大学は教育、研究の場である。一方、図書館は教育、研究の中心的役割を担っているといっても過言ではない。また、情報ストックの機能としての役割もはたしている。単なる蔵書の倉庫であってはならない。結局、利用者に依存している。従って、「大学生活において、図書館という現場に足を運ぶことから始めよう」を提言したい。開巻有益。それが重なり、図書館で思索を巡らす至福の時を演出されることを期待する。

「 ----- 。しどろもどろの歩き方でなく、大地を一步々踏みつけて、手を振って、いい気分、進まねばならぬ。急がずに、休まずに。」

志賀直哉 作 暗夜行路(前編)から

図書館との軌跡	1
セミナー紹介	2 - 3

本の紹介	4 - 7
図書情報センターから	8

★ セミナー紹介 - 第8回 - ★

このコーナーではゼミ担当の先生がたにゼミに関してコメントをいただいております。今回は、情報文化学科の近藤成二郎教授からゼミでの研究内容とゼミのあり方について、同じく情報文化学科の本多一彦助教授からゼミの目標と具体的な研究テーマについて、それぞれ紹介していただきました。

近藤ゼミの紹介(情報文化学科、専門演習、卒業研究)

情報文化学科 近藤 成二郎 教授

世の中一般ではシステム開発に対する認識がプログラムを作ることと誤っているようであるが、それは多分に工数的にいった大きなウエイトを占めるものがあるが、今や古い考えかたであるといわざるを得ない。確かにプログラミングの部分の重要性は認識されているが、コンピュータ・アーキテクチャを熟知し、数学的、経済学的な知識を保有し、職人的プログラミング技術を駆使しなければならなかった時代に比べれば、現代はすっかり様変わりをしているというのが現実である。しかし、より複雑化しているコンピュータ世界では英知の限界に挑戦しているプログラミング部分も人の目に触れない水面下で活動している事も事実である。

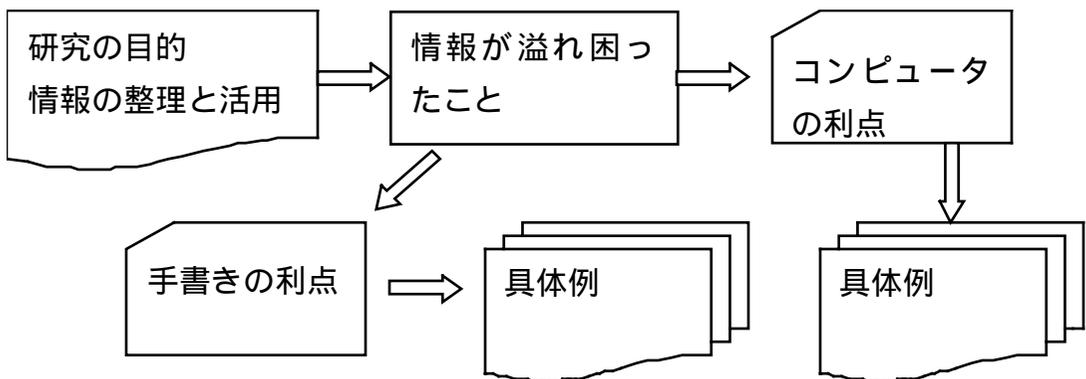
本ゼミにおいては、現代のクライアント・サーバ・システムにおけるシステム開発の様相を把握し、システム開発とは何をなすべきことを第一に置くべきかを研究する。反面、古きを温ねて新しきを知る事も重要な観点であることも認識し、システム開発における要素技術がどういった部分に、どのような方法で、どのような形で、取り入れられ活用されているかを研究していく。そして、その作り出されたシステムを相互接続しているコンピュータ・ネットワークにも視点を向け、ネットワークとは何ものを追及していく研究も行われている。この現代社会において成長し続けている巨大生物の如きネットワークも現代の世相を反映した飽くなき人間の欲望のエネルギーが生み出した産物である事を受け止め、それにチャレンジしていくようなネットワーク制御のあり方も研究していく(ある意味では現代のドン・キホーテといえるかもしれないが)。現実のネットワークに目を向けてみれば、今や「光」全盛になりつつあり(インフラ面では既に光が主流である)スピードと信頼性を追及していく一方、経済性の追及に如何なる工夫と模索がなされているか、そして、個人のプライバシーを侵害しないセキュリティの効いた、近未来の快適なネットワークのあり方とその運用管理などについても、追求していくものである。

このような研究をしていくのであるが、研究においても遊び心が大きな発想を生むという重要性があり、自由、闊達な気風を尊重したゼミの雰囲気の中で、勉強の楽しさを覚えていくのもこのゼミのあり方である。

本多ゼミの紹介(情報文化学科、専門演習、卒業研究) - コンピュータを使って情報を整理し活用しよう -

情報文化学科 本多 一彦 助教授

コンピュータは一度入力さえすれば、検索の機能を利用して簡単に情報を引き出すことができます。しかし、緊急なこと、急に思いついたことなどを書き留めておくには「紙と鉛筆」の方が便利です。「コンピュータ」という情報を整理するための便利な道具の最大のライバルは、「紙と鉛筆」であるといえるかも知れません。いくらコンピュータが発達したからといって、「紙と鉛筆」を捨て去るわけにはいきませんし、かといってコンピュータの利用を避けて通ることもできません。残念ながらドラえもんのようなロボットが開発されていない現在では、人間の頭を使うことにより、自分の生活スタイルに適したコンピュータと「紙と鉛筆」の共存をはかり、効果的な情報の整理と活用を考えることが必要です。本ゼミでは、情報が溢れ收拾がつかないこと、もしくはそれが予想されるテーマをゼミ生自らが探し出し、どのように解決していくかを研究してもらっています。



以下は過去の卒業研究のテーマです。

- ・ コンピュータを利用した料理レシピの整理と活用
- ・ 思考支援ツールを利用した物件整理法
- ・ 目で見るスポーツ外傷
- ・ アウトライン機能を利用した情報整理法
 事故のいろいろな原因に関する注意点
- ・ コンピュータなどを利用したボウリングのスコアの整理とそれに基づいた練習方法の改善

✧ 本の紹介 ✧



『号泣する準備はできていた』

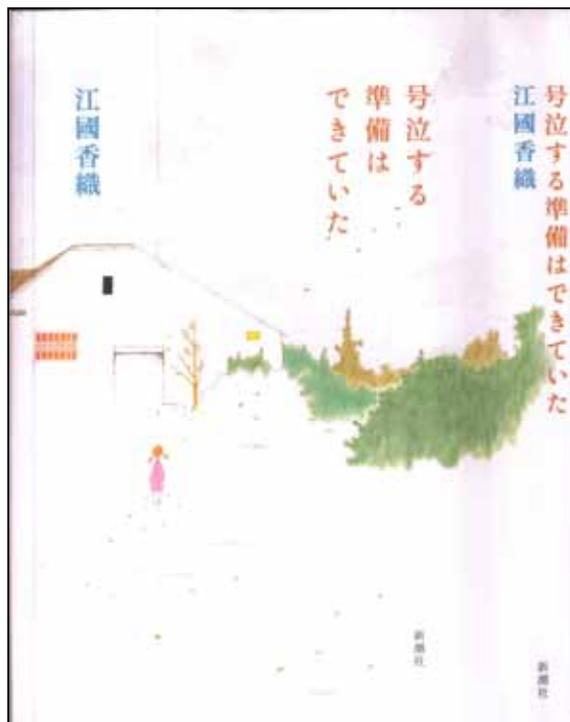
江國 香織 著
新潮社 2003年

紹介者：健康栄養学科 江上 いすず 助教授



これほどインパクトのある題名はないような気がする。誰もが一度聞いたら忘れられないであろう。ひとりの読者としてこの本を読むにあたり、号泣する心の準備はできていたのだが、号泣するまでには至らなかったのが本音である。12編の短編が集められているが、すべて日常的な出来事を、いろいろな人たちが、いろいろな場所で、いろいろな記憶を持ち、いろいろな顔で、いろいろな職種で、おそらく他愛もない日常のひとこまを、一つの大きなテーマとして描いている。著者いわく「たとえば悲しみを通過するとき、それがどんなに不意打ちの悲しみであろうと、その人には、たぶん、号泣する準備ができていた。喪失するためには所有が必要で、少なくとも確かにここにあったと疑いもなく思える心持ちが必要である」と、また、「かつてあった物たちと、そのあともあり続けなければならない物たちの短編集になっている」と説明している。この考えを前提にして読めばこの題名は頷けるのではないであろうか。

作者の文章表現として、同じことばを4回も繰り返すフレーズがある、たとえば、「なんてすてきななんてすてきななんてすてきななんてすてき」となどは流れるようなテンポが自然で、つい口ずさんでしまいそうである。また、ほとんど1頁分が主人公の気持ちや、詳細な情景が延々と描かれ、一文で終わっているページがある。この箇所はノープレスで一気に歌うような迫力があり、著者の感情の起伏がひしひしと伝わってきた。12編は全体を通して、題名ほどドラマティックなものではないが、喪失してはじめて所有していたものの価値がわかり、自然に涙することが出来るというのはある意味、幸せものであると言いたいのかも知れない。





『飲食男女(おんじきなんによ) おいしい女たち』

久世 光彦 著

文芸春秋 2003年

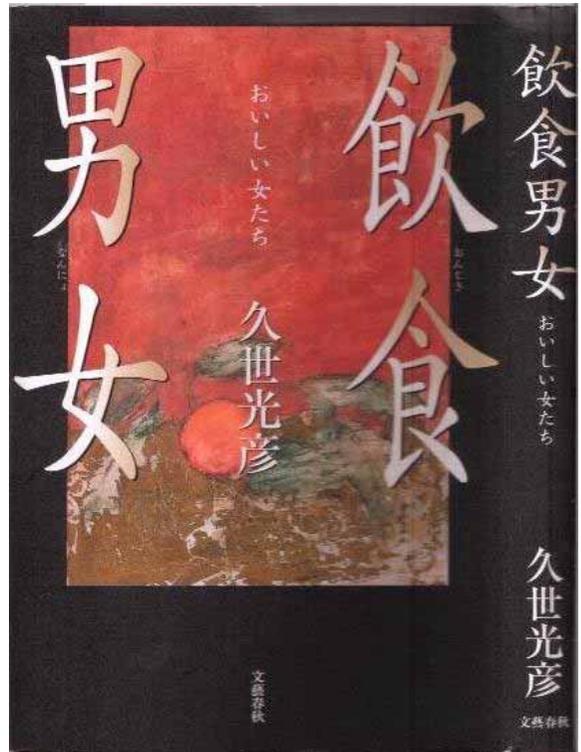
紹介者：健康栄養学科 江上 いすず 助教授



吉本ばなの『キッチン』や円地文子の『食卓のない家』のような食卓や台所を題名にして家族のあり方などをテーマにした小説は多いが、グルメ本以外に食品そのものを題名にしている場合は意外に少ないらしい。それは歌の題名でも、考えてみれば「りんごの歌」ぐらいで、食品や料理が歌詞には出てきても主役にはなりきれないのが正直なところである。そもそも食べ物はあまりにも生活感がありすぎてフィクションの世界には馴染まないのであろうか。

本書の場合は食をキーワードに著者の少年期から青春期、青年期、中年期、高齢期とほぼまんべんなく、ライフステージでの食と女性とのかかわりを書き記してある。それぞれの短編の題名をあげると「豆腐弥左」「春の蕎麦」「えっちゃんのジャム」「桃狂い」「へちま」「山ぐみの秋」「とろろいも」「月心寺の真桑瓜」「粒あん漉しあん」「煮凝」「おでん」など、まことにバラエティに富んでいる。この題名を見ただけでも著者が食通であることは一目瞭然である。それにプラスして、三つの食として食・色・飾は三位一体をしていることがベースとなっている。著者は本の題名として4文字はすぐ浮かんだようであるが、読み方は飲食男女を《いんしょくだんじょ》ではあまりにも素っ気ないので、《おんじきなんによ》と読ませることで食と色がマッチして気に入っているらしい。『宇津保物語』に《ありつる魚は、魚と見つれど、百味を供へたる飲食(おんじき)に成りぬ》とあって、いまでも短歌の世界では飲食(おんじき)はよく使われているようである。

一般的に、過去の遠い思い出を浮かべる時には、季節の風景とか、相手の言った言葉であったり、行動であったり、もちろん、あの旅先の料理は美味しかったなどは、だれでも感じることであるが、その場面場面での出来事が、このタイトルの食品や料理にピッタリ当てはまるのは、著者が食べ物の特徴を的確につかんでいるからに他ならない。「へちま」の中では、訪問した客(著者)に対して、家の者が最初に煎茶と牛乳をおもむろに運んでくる。次にメロンパン、クリームパンとなり、卵の黄身を落とした丼のお粥、赤身の刺身、子魚と貝の佃煮、梅干し、焼き茄子、梨、ぶどう、ケーキ一個に塩煎餅、そして最後にはもう一度、牛乳一合が立て続けにおもてなし料理として出てくる。こんな献立はありえないと思いながら読み進めると、正岡子規が晩年の一年間の、死に近いときの献立だとわかる。解説によると、子規が毎日三回の食事の献立を間食まで記録した『仰臥漫録』に記してあるらしい。これはほんの一例で、著者の食通ぶりが全編に現れており、食にまつわる短歌から、夏目漱石の『三四郎』の中の有名なセリフ、“stray sheep(迷える子羊)”まで出てきたりして、文学とグルメ好きにはお奨めの書である。



『蹴りたい背中』



綿矢 りさ 著

河出書房新社 2003年

紹介者：情報文化学科4年 植田 啓太



物語の主人公ハツは学校で友人も少なくまた作ることも拒んで学校生活を送っている。ある日、ハツはクラスに自分と同じように一人にいる男子、にな川と共通の話題を通じて知り合うことになる。

にな川と交流が増えていくに連れて、ハツにある感情が湧き上がってくる。彼の背中を蹴りたい。新たな居場所を見つけたハツのその歪んだ感情は、彼女をどう変えていくのだろう……。

この作品を初めて読んだ時は、その独特の感情に奇異なるものを感じるかもしれない。しかしそれは誰にでもあるものではないだろうか。愛しいものを傷付けたい、心の奥底にあるどす黒い感情を表現しているこの作品は、社会で起こっている事件に繋がるものを感じる。また、たとえ表面化していなくても子どもの時に無性にペットを叩きたくなくなったり生き物を痛めつけたりすることを罪悪感も無く考えられたことも同じだろう。愛情と暴力的衝動、一見すると相反する感情は似て非なるものなのかもしれない。

このような曖昧なことを表現できているのも、この作品の魅力と言える。

また、人の心情などの表現がうまい。こういった表現を見かけたらその場面を想像してほしい。まさにその表現がピッタリだと実感することができるくらいリアルに書かれている。

作品自体以外にもこの作品（他にもあるだろう）は読みやすい構成になっていると思う。文字がびっしり詰めてあるのではなく適度に間隔が空いているし、余白も多めに取られているため、ページを開いた瞬間に文字の多さを感じることはないだろう。またリズム感や段落分けも整っており、止まらずにスイスイ読めるはず。

活字の本は苦手と言う人も読んでみようかなと思えるため一度手に取ってはどうか。



『コンピュータは、むずかしすぎて使えない！』



アラン・クーパー 著

山形 浩生 訳

翔泳社 2000年

紹介者：情報文化学科4年 梅田 雄也



著者のアラン・クーパーは、デジタル業界では「Visual Basicの父」として有名である。また彼は先駆的なソフトウェア作家でソフトウェアデザイナーでもある。

ソフトウェアには使いにくいものが多いと、誰もが思っていることだろう。ソフトウェア

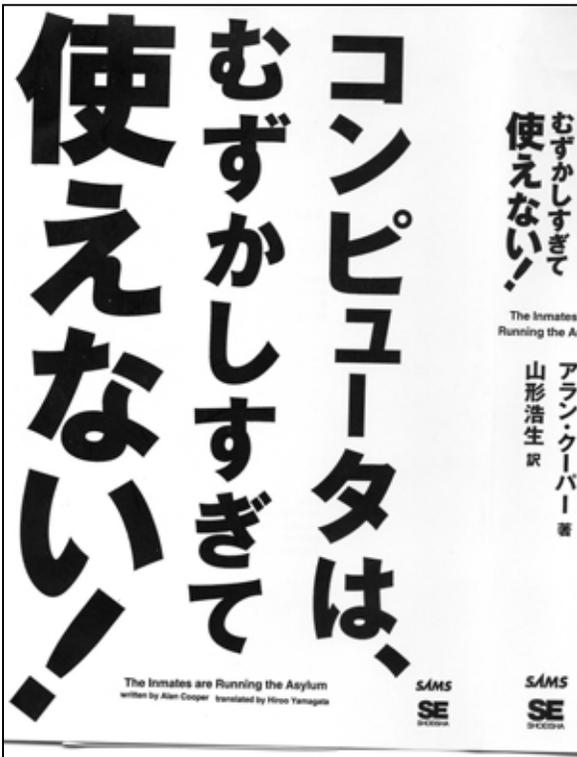
はバージョンアップされるたびに余計な機能が増えるばかりで、遅く、不安定になるばかり、バグの方も本当に大丈夫なのかと疑いたくなる始末。

そういう事態に対して、彼は、ソフトウェアとして必要な仕様をきちんと事前に決めておいて（この段階で、デザインをしっかりとこなうべきと言っている）それからプログラミングにかかれと言う。そのためには、デザイナーがうまくデザインしさえすれば万事解決と言うのだが、デザイナーの作ったデザインが良いかどうかをどうやって見分ければいいのかという肝心なところが書かれていないのがこの本の弱点である。

本で紹介されている事例を見ると、ペルソナ（仮想ユーザー（一人だけ））を想定してその人が容易に使えることを目標にデザインすることやシナリオ（仕事を組み込むためのツール）を活用して利用者や利用場面をはっきりさせることで、ソフトウェア製品がかなり改善されたことが分かるが、そこでのデザイナーの役割というのがイマイチ見えにくいことも、この本の残念なところである。

悪いところばかりでなくこの本の良いところも挙げておく。プログラマーにとってよいと思えることは、それ以外の世間一般の人々にとってはちっともよくないことなのだ、ということを確認している。例えば、細かく分けたフォルダにファイルを入れて整理したりする「分類型」アプローチをうまく使いこなすことのできるのはプログラマーだけで、それ以外の大多数の人は分類などしたくないし、そもそも各人の分類の方法もバラバラで同じものにはならない。

このようなユーザーインタフェースに関する本に興味のある人は今後のコンピュータ社会を知る上でぜひ読んでほしい。



★ 原稿募集中 ★

『図書館だより』では、読者の皆様からの原稿を随時募集しています。1 ページ全体に掲載をご希望の方は 1000～1300 字、半ページに掲載をご希望の方は 400～500 字が大体の目安となります。内容の前部分に、

名前 所属学科

学生の方は学籍番号

本の標題 著者名

出版社名 出版年

を明記し、文書を保存されたフロッピーまたは印刷された用紙を、図書館カウンター（内線：362）までお持ちください。

採用された方には粗品を差し上げます。たくさんのご応募をお待ちしています。

図書情報センターから

図書情報センターには、LibVision という図書館情報システムがはっています。LibVision の公開検索（OPAC）は、皆さんが沢山の図書館資料の中から最も必要としている本や文献を探し出すのを手助けします。

この公開検索には、目的の資料目録を呼び出すことができる「標準検索」と、膨大な文献資料から最適な専門分野の文献へ絞り込むために様々な条件を選択・入力して検索する「複合検索」など、多様な検索方法があります。

図書情報センターを利用するとき、基本的で重要なことは、検索を効率よく行い、目的の資料に素早く到達することです。いろいろな検索方法を試してみましょう。



KWIC(クイック)検索を中心にした LibVision の標準検索方式です。探したい図書資料の書名や著者名をはっきり覚えていない時、検索条件がまだおぼろげなときに有効な検索方法です。

探したい図書資料が複数ある場合、検索条件や限定条件をいくつか指定して目的の資料に絞り込みたい場合など更に複雑な検索が必要な場合に有効な検索方法です。



平成16年4月
編集：名古屋文理大学図書情報委員会
発行：名古屋文理大学図書情報センター
〒492-8520 稲沢市稲沢町前田 365
TEL：0587(23)2400 FAX：0587(21)2844
e-mail：toshokan@nagoya-bunri.ac.jp

